

## 第1節 研究目的

今の台湾では、欧米や日本の推理小説が多く翻訳され、人気を博している。台湾の文芸評論家である傅博は『謎詭・偵探・推理』において、はじめて計画的に海外の推理小説を出版した台湾の出版社は、林白出版社だったと述べている。傅博の調査によると、1977年4月に林白出版社は松本清張の『ゼロの焦点』（中語訳：『零的焦點』）を出版し、後に『松本清張選集』を10冊ぐらい出版している。その時点から、推理小説という文学ジャンルとその概念が台湾で受容されはじめた<sup>1</sup>。その後、多くの推理小説が台湾に紹介され、現在では東野圭吾や宮部みゆきなどの推理小説家が台湾で有名になっている。また、横溝正史、松本清張など大正10年代から昭和30年代にかけて活躍した推理作家の作品が再整理され、出版されている。例えば、獨歩文化出版社は2010年から、全13冊の『江戸川乱歩作品集』を出版している。

そのほかに、推理の要素やサスペンス性を売りにする日本の映画（例えば東野圭吾の『容疑者Xの献身』）や、人気アニメ（青山剛昌の『名探偵コナン』）なども台湾に放送され、広く知られている。

日本の推理小説の種類は多彩である。初期の本格推理、変格推理、社会派などのほかに、今は新本格派、旅情ミステリーなど、新しいスタイルも次々と生み出されている。しかし、日本の推理小説はどのような展開を辿っているのか、筆者はこの点に興味を感じているので、日本の推理小説の発展史を調べてみた。すると、日本の推理小説の発展に一番大きな影響を与えた人が、江戸川乱歩であることを知り、さらに興味を持つようになった。

日本の推理小説の萌芽期は大正期である。当時の日本では、まだ欧米の翻訳推理小説が主流であった。しかし、乱歩が大正12(1923)年に「二銭銅貨」を発表し、そのユニークなトリックや巧妙な筋の展開などが欧米の推理小説に劣らぬほど優れているものだったので、大きな反響を得られた。その後、乱歩は続いて大正14(1925)年に「心理試験」「屋根裏の散歩者」「人間椅子」など、スタイルはそれぞれ異なるものの、推理小説を次々と発表して、大好評を得た。さらに、乱歩は推理小説の文学性を強調し、多くの推理小説に関する評論を発表

---

<sup>1</sup> 傅博『謎詭・偵探・推理—日本推理作家與作品』、獨歩文化、2009年、pp.20-22。

し、推理小説の評論家としても活躍した。

乱歩の作風は多様と言える。謎解きを主体とする本格推理だけでなく、乱歩は人間の繊細な心理描写にも優れ、作品は往々にして一種の独特な雰囲気を作り出している。現在では、乱歩の作品を愛読する読者が増え続け、また彼の作品を研究する人も多くなっている。筆者自身もこんな乱歩の作品に魅力を感じているため、彼の作品を修士論文の研究テーマに選んだのである。

研究の範囲については、乱歩の作品から、「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」の三作品を研究の対象とする。第1回江戸川乱歩賞を受賞した『探偵小説辞典』（講談社、1998年）の著者・中島河太郎が『推理小説展望』において、「乱歩は純粹理知文学である推理小説の先駆者の榮譽をになったばかりでなく、潤一郎、春夫の怪奇幻想文学の継承者でもあった<sup>2</sup>」と述べているように、乱歩の作品は推理を中心とする本格推理と、怪奇幻想の要素を含む変格推理という二つの類型に分けられる。

そしてその二つの類型の要素を同時に内包する作品もある。例えば、「人間椅子」などはミステリー性が強い一方、幻想性もあわせ持っている。また「陰獣」は謎解きする面白さが感じられるだけでなく、乱歩が創造した幻想的世界の描写も生き生きとしている。

このようなミステリー性と怪奇幻想の要素を有する乱歩の推理小説から、彼の初期の代表作である「人間椅子」「屋根裏の散歩者」「陰獣」を取り上げ、構造分析、身体論、人物造形といった方法論を通して、乱歩作品の魅力と文学性を明らかにしたい。

---

<sup>2</sup> 中島河太郎『推理小説展望』、双葉社、1995年、p.69。

## 第2節 先行研究

江戸川乱歩の研究史において、まず触れなければならないのが中島河太郎である。中島河太郎は、昭和22(1947)年から執筆に取りかかった、「日本推理小説略史」(「探偵新聞」、1947-1949年)をはじめとしてミステリー小説評論家として活動を開始した。海外や日本の推理小説を評論する彼の「探偵小説辞典」(「宝石」、1952年11月号から1959年2月号まで連載)は第一回江戸川乱歩賞を受賞し、もう一つの代表作である『推理小説展望』(双葉社、1995年)は日本推理作家協会賞を受賞している。

長沢隆子は『現代文学研究 情報と資料』において、江戸川乱歩の研究文献について次のように紹介している。

参考文献目録は、中島河太郎編『江戸川乱歩——評論と研究』(昭55・6講談社)に、「江戸川乱歩研究文献目録」(中島河太郎編)があり、これが現在最も詳細なもので、大正十二年～昭和五十五年三月の唯一の乱歩文献<sup>3</sup>。

以上の引用が示すように、中島河太郎の推理小説に関する評論は乱歩研究において言及せねばならぬ重要な資料であり、極めて参考価値がある。また、乱歩に関する研究文献をまとめたものとしてほかに浜田雄介の「江戸川乱歩研究文献目録」があり、この目録は昭和50(1975)年1月より平成6(1994)年8月までの研究資料を集めている。

以上の二つの目録に紹介されている乱歩関係の文献は非常に充実している。また研究誌の特集として、『国文学解釈と鑑賞』(1994年12月号)は「江戸川乱歩の魅力—生誕100年〈特集〉」の特集を組み、乱歩の研究もアカデミックといえるほどにまで高められたと言えよう。

以上の目録と特集を参考として、本論の研究範囲と関連性の高い論文を集めた。その中から三篇を取りあげ、その概要を述べておく。

鈴木貞美の「江戸川乱歩、眼の戦慄—小説表現のヴィジュアルリティーをめぐって」(『日本研究』、2010年9月)では主に乱歩作品の視覚表現に着目し、日

<sup>3</sup> 長沢隆子「江戸川乱歩」長谷川泉編『現代文学研究 情報と資料』所収、至文堂、1987年、p.156。

本の小説における視覚表現の歴史を概論している。また鈴木は「レンズ仕掛け」「人形幻想」「オブジェ」などの主題を取り上げ、乱歩の作品「闇に蠢く」「盲獣」を中心に分析している。高橋世織の「乱歩文学における〈触覚=映像〉の世界」(『国文学解釈と鑑賞』、1994年12月)は主に乱歩の作品の視覚性を論じている。浜田雄介の「『陰獣』論」(『國語と國文學』、1988年8月)では性格が正反対の2人の推理小説家の行動と心理をめぐって、乱歩の「探偵小説」の理知性と幻想性が交錯、融合する部分について分析している。

上述の論文は感覚表現といった身体的論述や登場人物の性格描写についての分析が多い。筆者は上述の論文を参考にしつつ、作品の構成や身体感覚、そして人物の性格描写などの論点から本論を進めていきたい。



### 第3節 研究方法

本論文において、筆者は主に「構造分析」、「身体論」、「性格描写」という三つの方法で乱歩の作品を分析する。そして上述の方法論の順にしたがって、その概要を以下に示す。

#### 3.1 構造分析について

文学における構造分析については主に大橋洋一の『新文学入門』「第5講 ありえない遭遇—構造主義—」を参考にしている。大橋の解説によると、構造分析とは文字と文字、あるいは段落と段落の間の配列を数学的・科学的に分析する方法である。構造分析を通して、都市構造やファッションなど文学と異なる面にも触れることができる。また、構造分析は作品のジャンルを問わず作品の構造の分析に終始する特徴があり、故に構造を論じる際に「高等文学」と「低俗文学」（大橋の用語）の差も消えると言う。しかし逆に言えば、大衆文学研究の道も構造分析を通して、広く視野が開かれることになる<sup>4</sup>。

そして構造分析においてはプロットとストーリーの分析や、語り手、焦点化の分析などが有効である。プロットとストーリーの概念について、廣野由美子は『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』において次のように説明している。

「ストーリー」と「プロット」は、一般に粗筋というような意味合いで、ほぼ同義に用いられる傾向がある。しかし、ロシア・フォルマリズム(Russian Formalism)から構造主義(structuralism)、物語論(narratology)へ至る文学研究においては、二つの概念は厳密に区別される。ストーリー（仏：histoire／露：fabula）とは、出来事を、起こった「時間順」に並べた物語内容である。他方、プロット（仏：discours／露：sjuzet）とは、物語が語られる順に出来事を再編成したものを指す<sup>5</sup>。

<sup>4</sup> 大橋洋一「第5講 ありえない遭遇—構造主義—」『新文学入門』所収、岩波書店、1995年、pp.125-126。

<sup>5</sup> 廣野由美子『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』、中公新書、2005年、p.9。

以上の解説によると、ストーリーとプロットの概念は文学の構造分析においてきわめて重要であり、作品はストーリーとプロットの巧妙な配列によって構成されていると言える。

そして推理小説というジャンルを研究する場合、プロットの分析は実に重要な方法の一つである。廣野由美子は『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』において、ミステリー（ここでは神秘、不思議、不可解なものという広義の意味を指す）と文学との関連性について次のように述べている。

イギリスの作家で小説研究者としても知られる E・M・フォースター（一八七九—一九七〇）は、小説の「プロット」について定義するさい、次のように、ミステリーとは何かということにも触れている。（中略）フォースターの区別によれば、ストーリーはたんに、次がどうなるかという原始的な好奇心のみを刺激するものであるのに対して、プロットは、新しい事実を「孤立したものとして見ると同時に、すでに読んだページに書かれていたことと関連づけて見る」ための知性と記憶力を、読者に要求するものなのである<sup>6</sup>。

以上の分析を見ると、プロットが知性と記憶力を読者に要求するという特性は、推理小説における謎解きの過程において特に重要であると同時にプロットの巧妙な配列も推理小説に欠くべからざる要素なのである。それでは、どのような展開が最も読者の好奇心を惹き起こせるか。また、どのようなプロットの配列が物語のサスペンス性をより一層高められるか。これらの問題点を考える際、プロットとストーリーの配置関係を詳しく論じる必要があるだろう。そのほかに、語りの特徴や焦点化の転換も読者の判断を左右し、サスペンス性を醸成する手法の一つであるため、語り手と焦点化の分析も本論文に取り入れることにした。

また、「探偵小説」というジャンルを論じる際、乱歩自身の「探偵小説」の構成要素に関する論説も参考になる。それは次のような内容である。

私は探偵小説の面白さの条件として、出発点に於ける不思議性、中道に

---

<sup>6</sup> 廣野由美子『ミステリーの人間学—英国古典探偵小説を読む』、岩波書店、2009年、pp.2-4。

於けるサスペンス、結末の意外性の三つを挙げる<sup>7</sup>。

乱歩の言を借りれば、出発点の不思議性、途中のサスペンス性、結末の意外性の三点が、「探偵小説」の面白さを生み出す三つの要素なのである。そして、乱歩は「探偵小説」における事件の解決を絶対必要と考えていない。意外性の要素を持つ作品なら、「探偵小説」のジャンルにも属しているということである。

「人間椅子」は推理の過程がなく、また探偵などの謎解き人物も登場してはいないものの、乱歩の「探偵小説」論に即してみれば、構成三要素がすべてあてはまる作品であることは明らかである。つまり本格、変格を問わず、この三つの条件が揃えば、「探偵小説」とみなすことができるというのが乱歩の見解である。そして三要素の分析を通して、「探偵小説」の完成度を検証することもできる。

以上に述べてきたように、構成の分析は推理小説においてきわめて重要であり、そこで筆者はまず構造の分析を方法論の一つとする。具体的には本論文第2章第1節、第3章第1節、第4章第1節において取り扱う作品の構造分析を目指し、それぞれの作品の構造の特徴を検証する。

### 3.2 身体論からのアプローチ

身体における概念としては、生理的、社会的、文化的など多方面にわたる。そして身体をめぐる言説は文学、語学という分野のみならず、医学的、哲学的、宗教的な面からさまざまな考察がなされてきた。本論文では、乱歩作品における身体的表現を分析することを目的の一つとする。

まず、身体論に関する研究として、前田愛の『増補 文学テキスト入門』の第3章「言葉と身体」を参考とする。前田はアメリカの批評家 R・D・ブラックマーの言説を例に挙げ、身体に支えられていない言葉は、根を持たない植物のように枯れてしまうと語っている<sup>8</sup>。つまり、身体を介して表現される言葉は人に伝える力を持ち、言葉もまた身体表現の一つなのである。さらに前田愛は身体と言葉の関係について次のように述べている。

そして人間の動作を表す言い回しを行住座臥に即して考えてみますと、

<sup>7</sup> 江戸川乱歩『江戸川乱歩全集第26巻 幻影城』、光文社、2003年、p.23。

<sup>8</sup> 前田愛『増補 文学テキスト入門』、筑摩書房、1993年、p.71。

たとえば行という言葉は、私は歩く、私は走る、そういう言い方に置き換えることができます。この場合、私という主語は、いわば私の意識、中心的な部分を表し、そして、歩く、走る、という述語、これはまさに身体を表している、こういうことになります。

つまり、文章というものは主語によって統合されていますが、述語による統合を浮び上がらせることによって、われわれは心とからだの問題を照射することができるのではないだろうかと思うわけです<sup>9</sup>。

以上の引用からもわかるように、身体的表現は実は人の意識と心理を暗に表しているので、作品の身体感覚に関する文章表現を分析することによって、作中人物の心理を究明することができる。

江戸川乱歩の作品は単にトリックにおいて卓越しているばかりでなく、彼の作品は、人間の心理変化や感覚表現の描写にも優れている。筆者が対象として取り上げた作品の中で、「人間椅子」には視覚、触覚描写が特に多い。また「屋根裏の散歩者」には屋根裏に隠れて他人の部屋を覗く主人公の変態行為が描写されている。そして「陰獣」ではマゾヒズムという異常性欲が一つのテーマであり、また作中人物の関係を読み解く重要な鍵でもある。このように身体描写は乱歩作品における重要な主題の一つであるため、筆者は第2、3、4章の第2節で身体論的アプローチから乱歩文学における身体感覚を論じる。

### 3.3 性格描写について

第2、3、4章の第3節では「性格描写」（人物造形）といった視点から乱歩の作品を分析する。まず性格描写について廣野由美子は『批評理論入門「フランケンシュタイン」解剖講義』において次のように解説している。

「キャラクター」とは、文学作品の登場人物のことをいう。さらに、登場人物の特性や行動様式、つまり、「性格」を指して、キャラクターという場合もある。登場人物やその性格は、他の文学形式やメディアでも表現できるが、人間の性質を描くうえでの豊かさと多様性、心理的洞察の深さなどの点で、小説に勝るものはない。小説とは、人物を造形する

---

<sup>9</sup> 注8 前掲書参照、p.71。



ものであるといってもよい<sup>10</sup>。

上の引用にある通り、人物の深まりが刻まれているかどうかで、小説の出来を大きく左右する。福田陸太郎・村松定孝共著『新編 文学用語辞典』にも「キャラクター」について、以下のような説明がある。

また、「キャラクター」はふつうには人間の「性格」そのものを意味し、文学作品の要素として重要なものであり、登場人物の性格が彼の運命を左右し、話の筋を進展させてゆく（たとえばシェイクスピアの悲劇など）ことがよくある。性格描写の巧拙は文学作品を批判する際のおもな基準の一つとなっている<sup>11</sup>。

以上の説明にあるように、登場人物の性格は深く、物語の発展に影響する。推理小説の場合から見れば、まず主要な人物として探偵役を担う人物と犯人役があるが、ここではまず探偵役から見ていきたい。

基本的に探偵役の登場人物の性格は謎解きの過程と結末に大きな影響を与える。例えば、台湾でも人気のあるアニメーション『名探偵コナン』と『金田一少年の事件簿』における主人公の性格を比較すると一層明瞭である。

『名探偵コナン』の主人公コナンの性格は熱く、自ら積極的に犯人を追いかける。しかも、コナンは犯人の自殺を全力阻止するので、犯人は最後にほとんど法律の裁きを受けることになる。しかし、『金田一少年の事件簿』の主人公金田一は行動力がコナンより弱い。彼は情に流されやすく、犯人の犯罪動機（復讐の場合が多い）に同情してしまいがちなので、犯人の自決を阻止することができず、犯人が最後に自殺した結末が多い。二人の性格の違いは、二つの作品の描き方を明らかに異なるものになっている。

そして犯人の性格は直接にその犯行動機に影響するので、犯罪者の心理を分析することによって犯行の動機を解明することができる場合もある。乱歩の作品に犯人の性格描写が丁寧に描かれるものが多い。例えば、「人間椅子」には女作家の佳子に告白する〈私〉の心理が非常に細かく描写されている。また光文社版の乱歩全集に収録された「屋根裏の散歩者」は最初の1ページから6ペー

<sup>10</sup> 注5 前掲書参照、p.63。

<sup>11</sup> 福田陸太郎・村松定孝『新編 文学用語辞典』、こびあん書房、1987年、p.73。

ジまでほとんど犯人郷田三郎の性格の説明に占められている。そして「陰獣」に登場した二人の小説家の性格は意図的にまったく異なるように描写されている。

ほかには、被害者や容疑者、協力者などの人物の性格も作品の展開に影響を与える重要な要素であるため、本論文では、性格描写の分析を方法論の一つとする。

